貝塚市文化財調査概要　1980

貝塚市遺跡群発掘調査概要 Ⅱ

1980·3

貝塚市教育委員会

はしがき

わが貝塚市は、緑豊かな和泉山脈と波静かな大阪湾に面し気候温暖で、特に平野部においては生活環境はすばらしいものがあります。こういっためぐまれた自然と古い歴史や、伝統にはぐくまれた貴重な文化的遺産を今日に伝えている町として知られています。なかでも祖先の人々の血と汗の生活の記録である埋蔵文化財の包蔵地が全地域50数ケ所に散在しており、これら埋蔵文化財包蔵地の発掘調査により、古代より中世に亘る集落遺跡が明らかにされつつあります。

この調査報告書は、昭和54年度中に市内の埋蔵文化財包蔵地において実施した貝塚市遺跡群発掘調査のまとめであります。近年、社会構造の変化と都市化、工業化が進む中で、こうした文化的遺産が急速に失なわれていく状況にあり、各地で開発か、文化財保護かと論議を呼んでいるところでありますが、この報告書は市民の皆様方のご理解を得まして、文化財の保護についてより一層認識を深めていただくための一助となれば幸に存じます。

貝塚市教育委員会

教育長　亀岡久夫

例　　言

1. 本書は、貝塚市教育委員会が、国庫補助事業（総額3,000,000円、国補助率50％、府補助率25％、市負担率25％）として計画し、社会教育課が担当実施した、貝塚市遺跡群発掘調査記録である。

2. 調査は、貝塚市教育委員会社会教育課、吉川和則を担当者とし、昭和54年4月16日に着手し、昭和55年3月31日終了した。

3. 調査の実施と整理にあたっては、久保泰浩、森茂、南川孝司、行岡英治、井坂恵子　上西弘美、北田公子諸氏の協力があり、第1章は、上西が、遺物観察表は、森、井坂、上西、北田が、トレースは、森、吉川、井坂が行った。又、第3章2の附編は、南川によるものであり、前田豊邦、酒井龍一、森田義孝、国乗和雄、広瀬和雄、片山彰一の諸氏からも有益な助言を得た他、土地所有者の森寛、阪上重宗、木下茂氏からも多大な協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

4. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望したい。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1
第２章　調査にいたる経過 …… 2
第３章　調査概要 …… 4
　○加治・神前・畠中遺跡 …… 4
　○木積観音寺跡 …… 10
　○秦廃寺跡 …… 15
　○試掘調査の結果より …… 19
　　加治・神前・畠中遺跡

挿図目次

1. 加治・神前・畠中遺跡
　位　置　図 …… 4
2. 加治・神前・畠中遺跡
　断面実測図 …… 5
3. 木積観音寺跡位置図 …… 10
4.　〃　　断面実測図 …… 11
5. 秦廃寺跡位置図 …… 16
6.　〃　　断面実測図 …… 16
7.　〃　　遺物実測図 …… 17
8. 加治・神前・畠中遺跡
　位　置　図 …… 19
9.　〃
　遺物実測図 …… 20

図版目次

第 1. 遺跡周辺航空写真
第 2. 加治・神前・畠中遺跡遠景
　遺構写真
第 3. 木積観音寺跡遺構写真
第 4. 木積観音寺跡、秦廃寺跡
　遺構写真
第 5. 加治、神前、畠中遺物写真
第 6. 木積観音寺跡遺物写真
第 7. 秦廃寺跡遺物写真
第 8. 遺跡分布図
第 9. 調査地位置図
第10. 加治・神前・畠中遺跡
　遺構実測図
第11. 木積観音寺跡遺構実測図
第12. 秦廃寺跡遺構実測図
第13. 加治・神前・畠中遺跡
　遺物実測図
第14. 木積観音寺跡遺物実測図
第15. 木積の地籍図

貝塚市遺跡群発掘調査概要

第1章　位置と環境

貝塚市は、大阪の南部、和泉地方の中心に位置する。大阪側に岸和田市、和歌山側に泉佐野市と熊取町に隣接する細長い地形をなし、北西は大阪湾に、また南は和泉山脈に達しており、平地は大阪平野から続く肥沃な和泉平野の中央部を有する自然環境に恵まれた都市である。このために地形は大別して山地、丘陵地、平地に分けることができ、和泉山脈から近木川、津田川、見出川などの川や多数の小川がこれらの地形を経て海へ流れている。

山地は、主に和泉砂岩によって構成され、急な傾斜地に刻まれている谷の出口には、発達した山間の小盆地があり、蕎原、大川、秬谷が東西に並んでいる。このあたりより、貝類の化石が出土することから、かつてはこの辺が海であったことがうかがえる。また、山間地帯のぶな林は、天然記念物となっている。

丘陵地は、主として花崗岩層からなる丘陵性山地と、洪積層からなる丘陵地の2つに分けられ、前者は蕎原、大川、秬谷から北へ木積、馬場附近、後者は木積盆地以北で、松山やみかんの栽培地となっている。平地も上下2段に分かれ、上段部は平地の大部を占める洪積層で、近木川、津田川、見出川によって深く刻まれ、川底との間は5～10m位の断崖になっている。このため、用水が十分に得られないことから、昔から灌漑用の用水池が数多く点在する。また、一段低い平地は、沖積層と呼ばれる最も新しい土地で、川の流域はその堆積物で、海岸の平地はもと海であったところがそれぞれ陸化したものである。

本市の産業は、上述した地形を利用しての農業と漁業が主であったが、漁業は近年、阪南港整備事業のため、魚業権が廃止となり、また農業は宅地開発などで農地が減少したとはいえ、大都市近郊農業に姿をかえつつあり、特に玉ネギ、フキ、里イモなどが有名である。

本市工業の特色として、繊維工業と金属工業が挙げられる。繊維工業は、明治時代から家内工業として、木綿表繊が営まれていたものが発展したものであ

り、金属工業の中心は、銅線鋼索関係で、特にワイヤロープが有名である。いずれも全国の生産量においても大部を占め、本市の主要産業である。また、伝統手工業には、木櫛製造があり、古く欽明天皇の御代に製造が伝えられたという由来伝説があり、平安時代の文献にも〝和泉櫛〟の名がみられ、平安時代中期にはすでに、名物であったことがうかがえる。工業都市として発展してきた貝塚市であるが、市政各分野にわたっての諸施策検討の必要性が高まってきているのが現状である。かつては白砂青松とうたわれた二色ノ浜を含む海岸も、埋立造成によって景観をそこなわれ、丘陵部においても宅地開発がすすめられている。これからの貝塚市にとって、緑や文化財などにめぐまれた地域特性との調和をはかりつつ、いかに質的に向上していくかが課題となるであろう。

（上西）

第２章　調査に至る経過

昭和52年3月に大阪府教育委員会より刊行された大阪府文化財地名表、分布図によると、わが貝塚市域には52の遺跡が記載されている。これはその前昭和46年3月の同文化財地名表、分布図の18と比べ、この数年に3倍近い数となっており、この間にこまめに歩いてくれた府文化財パトロール員を始めとする人々による工事中の発見と、大阪府教育委員会、元興寺文化財研究所[註1]地域の文化財保存団体[註2]による踏査の結果にほかならない。

現在、貝塚市教育委員会に備えつけてある貝塚市文化財地名表、分布図には56の遺跡が記載されている。そのうち約半数の27ケ所が散布地として種別されている。そのほか、城跡、寺院跡等いまだ確実な遺構が検出された遺跡はほとんどないに等しい。そのような状況の中で、昭和51年秋より個人住宅建設計画等も含め、周知の遺跡内で計画されている土木工事等については「埋蔵文化財包蔵地の発掘届」を提出してもらい、又昭和53年度より国、府の補助金をうけ、

土木工事等の事前調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を明らかにする一助として、今後の文化財保護・保存の資料づくりにいそしんでいる。今年度はその文化財保存事業を始めて2年目にあたる。

そこで今年度文化庁長官宛提出された市域の各遺跡内での「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」の件数をみてみると約80件となり各遺跡別の件数は下記のとおりである。これらは工事計画の位置・面積・内容等により立会・部分発掘・全面発掘等の調査内容にわかれるが、各遺跡別の調査件数は下記のとおりである。

工事の目的・内容等は、住宅建設計画がほとんどであるが、交通・地理的諸条件より、南海貝塚駅から大阪湾にいたる貝塚寺内町は、耐久年数を過ぎようとしている家屋も多く、建て替え工事が多く行われている。又、南海線と国鉄阪和線に囲まれた約0.8㎢の加治・神前・畠中遺跡も旧村内の建て替え及び周辺田畑からの新築工事等の計画が数多くみられ、この2遺跡が発掘届・調査件数の特に多い遺跡となっている。

今年、調査の概要を報告するのは上記の加治・神前・畠中遺跡、木積観音寺跡、国鉄東貝塚駅東の秦廃寺跡の各遺跡である。

遺跡名	加治神前畠中遺跡	貝塚寺内町	新井ノ池遺跡	地蔵堂廃寺跡	新井鳥羽遺跡	積善寺城跡	高井天神廃寺高井城跡
発掘届提出件数	26	23	6	4	4	4	3
調査件数	22	16	7	4	4	3	3
	長楽寺跡	木積観音寺跡	沢海岸遺跡	秦廃寺跡	半田遺跡	澱池遺跡	沢城跡
	2	2	1	1	1	1	1
	2	1	1	1	1	1	1

註1. 1973.2 元興寺仏教民俗資料研究所
「泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書」

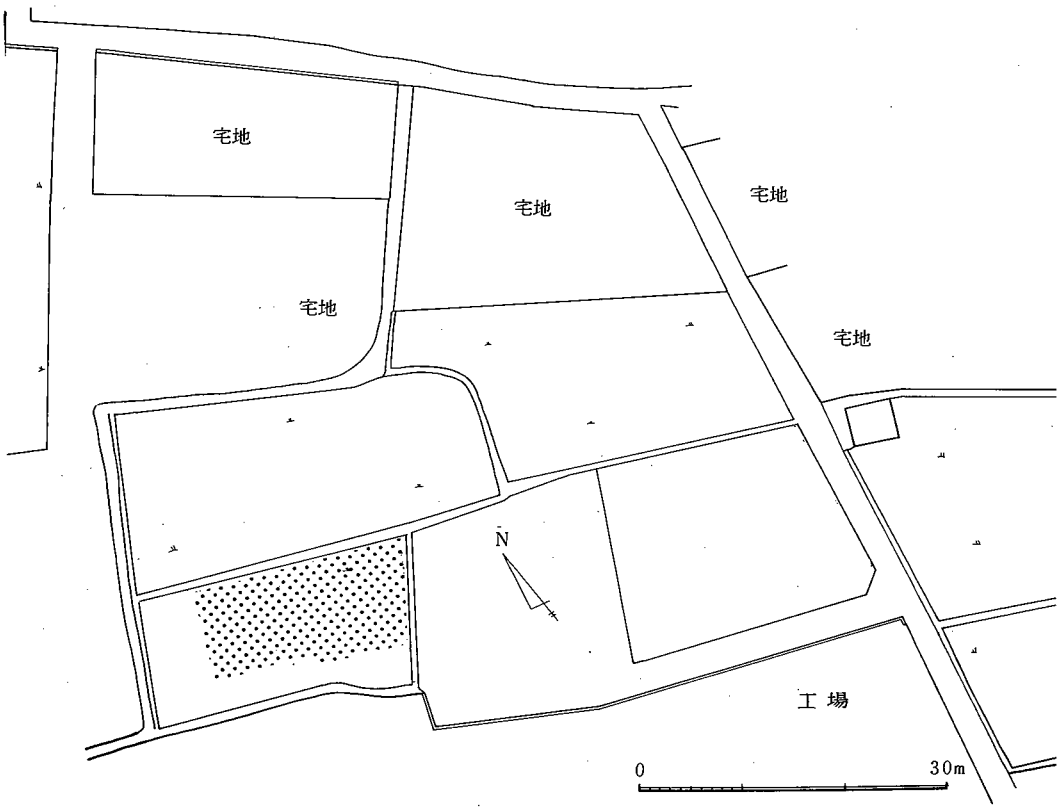
註2. 1973.1 泉州郷土史研究会 「郷土資料いづみ」

第３章　調　査　概　要

1. 加治・神前・畠中遺跡（79－1）

近木川下流の右岸、低位段丘上に位置する加治・神前・畠中遺跡は、約0.8㎢を有す縄文時代から室町時代に至る複合遺跡として周知されている。遺跡は加治、神前の村及び市道小瀬王子線沿いに家屋が建て並ぶが、畠中、脇浜あたりには田畑も多く残されている。しかし近年住宅建設がかなりのペースで進んでおり、遺跡を縦断する計画道路貝塚中央線が着手されれば道路周辺の田畑がまたたく間に住宅と化していくことが予想される。

今回の調査地は、近木川の河岸段丘上にあり、字茶ノ木原と呼ばれ、78－2の調査地のすぐ西に位置する。南に隣接する工場とは、数メートルの比較差が

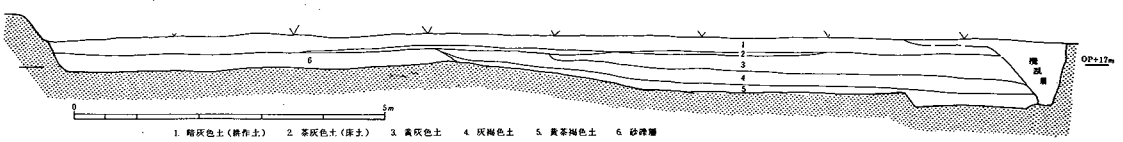


挿図１　位　置　図

ある。調査時にはすでに擁壁工事が行われていたため、南端は少し削平されていた。種々の事情により遺構面が一段下がる地域においては調査掘削深度を制限され、又、グリッド的な調査をしいられたため、十分な調査は行いえなかった。調査面積は約２１０㎡である。

1. 層　位

調査区の基本的な土層は、第１層が暗灰色土（耕作土）、第２層が茶灰色土（床土）、第３層が黄灰色土、第４層が灰褐色土、第５層が黄茶褐色土となる。調査域北部においては第３層以下がみられず、東側では砂礫層に、西側は黄色粘土層となる。調査域中央部から南は低く傾斜しており、そこに遺物を包含する第４層、５層がみられる。出土遺物は須恵器、土師器等、古墳時代～平安時代に至るものである。又、東トレンチを除き第５層以下は調査できなかったため、遺構は第３層（北側）、第５層（南側）上面で検出したものである。標高16.8～17.2ｍ前後である。



挿図２　　断面実測図

2. 遺　構

検出された遺構は、ピット30余個と溝状遺構である。

ピットは、ほぼ円形を呈し直径20～30㎝、深さ10～25㎝のもの、直径40～50㎝、深さ20～40㎝のものに大別でき、相対的に北部（主に西側であるが）において検出したピットは小さいものが多い。約半数のピット埋土中より細片ばかりであるが土師器・須恵器と黒色土器が出土した。又、20㎝余の河原石を根石状においたピットもみられた。しかし、各々ピット間における相互の関連性は不明である。

3. 遺　物

今回の調査により出土した遺物は遺物収納箱4箱である。サヌカイト剥片、銅製遺物を除けばすべて土器であり、多くは第4層灰褐色土からの出土である。数点黒色土器がみられるが、須恵器と土師器がほとんどであり、古墳時代から平安時代にいたる遺物が出土しているが、平安時代前期頃の遺物が多くみられる。

土師器甕は、口縁部が外反し端部で内側に肥厚するもの、内傾するもの、又口縁部が短く外反するもの等がみられ、体部外面は、縦方向の荒いハケ目を有するもの、手づくね風のかるいナデしあげのもの等がみられる。

坏は、底部が大きく口縁部が短く外傾するもの（口径17㎝　器高2.5㎝）、底部からゆるやかに内弯した後外反し、端部で凹みを有するもの（口径16㎝、器高3.5㎝）等がみられる。

須恵器坏は、高台を有す　やや内弯ぎみに口縁部をもつもの、ほぼまっすぐ外方にのびるもの等がみられ、蓋も天井部にヘラ削りをくわえず口縁部に返りをもたないものがみられる。そのほか糸切底をもつ瓶底部も出土している。黒色土器は数点しかみられず、高台付坏や内黒の口縁部の外面に指圧痕が残るもの等がみられる。

そのほか、長頸壷・たこ壷・製塩土器等も出土している。

土器番号	器種	形態	手法	備考
1	須恵器蓋	口縁部は、ほぼ垂直に下り、口縁端部は屈曲して一条の稜を作る。 天井部は平ら	口縁部（内外）回転ナデ調整 天井部は大体無調整、同内面はナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　暗灰色
2	須恵器蓋	天井部は平らで口縁部との境で丸味をもつ。 端部は鋭いかえりを持ち、先端はやや外方に反転させる。	口縁部（内外）回転ナデ調整 天井部外面はヘラ切りの上を浅い回転ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色
3	須恵器蓋	ふくらみをもたず天井部は平坦面となる。口縁部との境は強い丸味を持つ段になって、移行 端部は断面三角状に下方へ突出	横ナデ調整	胎土　良撰 焼成　軟質　不良 色調　青灰色～白灰色
4	須恵器蓋	天井部は平らで口縁端部はやや内傾気味に下方へ突出し、丸くおさめる。	横ナデ調整 天井部はヘラ削りか	胎土　良撰 焼成　やや軟質 色調　白灰色

土器番号	器種	形態	手法	備考
5	須恵器 高台付坏	口縁部は丸くおさめる 高台の踏んばりは弱く外方寄りに付けられる。	回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色
6	〃	口縁部は内彎しながら外傾し、端部は丸味がある。 高台は貼り付け高台である。 腰は角ばっており、高台はやや内側に付く	口縁部（内外）横ナデ 底部　高台寄りの部分のみ回転ナデ 中央寄りはヘラ切りのまま	胎土　良撰 焼成　良好 色調　白灰色
7	〃	口縁部はほとんど外反せず、やや薄くなって丸くおさめる	回転ナデ調整	胎土　良撰 0.1～0.2 ㎝ の砂粒を含む 焼成　良好 色調　青灰色
8	須恵器 壺 （長頸？）	高台はやや高いが踏んばりが少なく、体部との境が甘くなる。 肩部は強く屈曲して張る。	回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色
9	須恵器 壺？	底部のみ残存　やや内彎するきれいな平底で、体部との境はシャープに仕上げる。	全体に厚みがあり、内部は回転ナデ 回転糸切底	胎土　良撰　泡状黒色粒を含む（外面に吹き出している） 焼成　良好 色調　内部　茶褐色、外部　灰色 自然釉灰が付着
10	須恵器 壺 （俵壺？）	あまり外反しない口縁部で、端部はやや薄くなった後、水平な面を作る。	内、外とも回転ナデ	胎土　良撰　微細な白色砂を含む 焼成　良好 色調　青灰色
11	須恵器 壺（広口壺？）	外反はあまり強くなく、端部でわずかに外方へ突出する。 端部上面は外傾する平面に仕上げる。	内、外とも回転ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色　断面は芯が褐色のサンドイッチ状 内、外面とも若干灰かぶり
12	須恵器 蓋	比較的低く、平担な天井部を持つ蓋である。	回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色 芯が褐色のサンドイッチ状
13	須恵器 坏　身	口縁部は欠損して不明 高台は踏んばりがなく、ほぼ体部との境に付く	体側部内・外面回転ナデ 底部内面　不定ナデ 〃　外面　回転ナデ、ただし、中心部はヘラ切りのまま	胎土　良撰　混入物ほぼ皆無 焼成　良好 色調　淡灰色
14	須恵器 壺(長頸) の肩部	丸い肩でヘラ描沈線２条遺存		
15	須恵器 壺？	上方で強く反転する薄手の口縁部であるが、端部は欠損	内、外面とも回転ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　内部　灰白色、上端は黒灰色　外部　灰色
16	須恵器 器種不明	深めの坪状の体部で平底である体側部に穿孔があって断面の状態から見て受け口状の注ぎ口が付いていたと思われる。肩部は残らないが、体側部との境が口縁状に上方へ突出しており、体部上端より一段低い位置に肩部を接合したものである。	底部のみ雑なナデ 他は全て回転ナデ 体部孔は横外方から突きやぶる	胎土　泡状黒色粒を含む 焼成　良好 色調　内部　淡灰色 外部　暗灰色 肩～体側部の一部に灰かぶりと自然釉あり
41	黒色土器 坏	全体に浅い器形を呈すると思われる。 体部外面は、やや凸凹が有る。	外面　指圧痕 内面　ヨコヘラミガキ 口縁部外端　横ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　内部　黒 外部　端部は黒、体部は乳橙色～褐色
51	土師器 皿	底部は平底で丸く屈曲して立上り外上方へ底部から120°ぐらいの角度に伸びる。		胎土　良撰 焼成　良好 色調　内部　乳橙色 外部　乳灰色

土器番号	器種	形態	手法	備考
52	土師器 皿	平らな底部に外傾する短かい口縁部がついている。 端部に少しはく離がみられる。	横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 乳橙色 外部 橙 色
53	土師器 皿	端部は丸くおさまる。 体部は丸くなだからなカーブを描いている。	マキアゲ成形 内外ともに横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 乳橙色
54	土師器 皿	口縁部はやや内彎ぎみに立ちあがり、端部で弱く外反した後、薄くなって丸くおさめる。	体部 横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 乳橙色 外部 淡橙色
55	土師器 皿	口縁部～底部にかけては丸味が強く底部との境は不明瞭	口縁部 横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 乳黄色 外部 茶褐色
56	土師器 皿	口縁部は短く内彎ぎみに立ち上がり、端部は丸い。 底部は1㎝程の厚みがあり。平らである。	口縁部 横ナデ調整 底部に指圧痕	胎土 良撰 1㎜程度の砂粒を含む 焼成 良好 色調 乳灰色
57	土師器 皿	底部から体部へゆるやかに外へ屈曲する。 端部は丸い	ナデ調整	胎土 良撰 0.5～1㎝の砂粒を含む 焼成 良好 色調 乳橙色
58	土師器 皿	口縁部～底部にかけてやや丸味があり底部との境は丸くなる。 口縁部は端部で小さく外反し、内側には細い線を入れている。	口縁部 横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 乳黄色 外部 乳橙色
59	土師器 皿	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。 端部は丸くおさめる。		胎土 良撰 0.1～2㎜程度の砂粒を多分に含む 焼成 良好 色調 乳橙色 外面に媒付着
60	土師器 皿	口縁部はやや内彎ぎみに低く立ち上がり端部はやや薄くして丸くおさめる。 底部は平ら。 外側の端部より表面はく離	口縁部 横ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 乳茶褐色 外部 乳灰色
61	土師器 皿	底部と口縁部の境は比較的強い屈曲を有す。 口縁部は外傾の強い直口縁で丸くおさめている。	口縁部 横ナデ調整	胎土 良撰 0.1㎜の砂粒を含む 焼成 良好 色調 内部 乳橙色 外部 茶褐色
62	土師器 皿	底部欠損 口縁端部は丸味があり体部との境は凹線で区画されている。	ナデ調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 淡黄褐色 外部 乳橙色
63	土師器 杯	平らな底にやや内彎ぎみの口縁部がついている。上方でやや外反する。底には指頭圧痕があり。安定性に欠ける。	口縁部(内外) 横ナデ 底部内面 ナデ	胎土 良撰 焼成 軟質 色調 内部 乳灰色 外部 乳橙色
64	土師器 甕 (河内系)	口縁部は、外反しながら上方へ伸び、ゆるやかな外彎をなしている。体部の肩は張りがない。口縁部の強い横ナデのため、くびれ部下方に段ができている	口縁部(内・外) 横ナデ 体部 内面 ナデ 外面 無調整	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 暗茶色 外部 茶灰色
65	土師器 甕	口縁部は短かく、水平に近く外反、端部は上方へ肥厚させる。 体部は、ほとんど肩の張らない形になる。	口縁部は内外とも横ナデ、体部外面は縦ハケメ。施し方に特徴があり、土器をゆっくり回しながらハケを器体から離さずに上下させるという方法である。	胎土 細砂を含む 焼成 良好 色調 橙赤色 外面はピンク色～赤灰色 2次焼成による変化を認める

土器番号	器種	形態	手法	備考
66	土師器 甕	ゆるく外反するくの字型口縁で端部は上方へ肥厚させている。 体部は若干肩が張っている。	口縁部は内外とも横ナデ 体部外面は不調整で凹凸が著しい 内面はナデ	胎土　粗砂(2~3㎜)が多い 焼成　良好 色調　橙褐色 表面は2次焼成と薄い煤で褐色がかる
67	土師器 甕	口縁部は外傾しながら、上方へのび、ゆるやかな外彎をなし、口縁端部で肥厚する。 体部の肩の張りが少ない。	口縁部にナデ調整 外面に指圧根	胎土　良撰　0.1~0.3㎝の砂粒を含む 焼成　やや軟質 色残　暗茶色 一部灰が付着
68	土師器 甕	口縁部は短かく、強く外反し、端部は上方へ肥厚させる。体部はほとんど肩の張らない球形に近いもの、65とほぼ同器形	口縁部は内、外とも横ナデ 体部外面は上半分が縦ハケメ、下半分は斜ハケメ、内面はナデ	胎土　粗砂を含む 焼成　良好 色調　橙赤色　体部下方は、黒斑がある。また2次焼成により部分的に灰赤色に変化
69	土師器 甕	口縁部は外傾しながら端部で肥厚する	口縁部　横ナデ 体部　内面は表面はく離 外面は上部に縦方向のハケメ、下部に斜め方向(右下り)のハケメあり。	胎土　良撰　砂粒を含む 焼成　良好 色調　内部　淡橙色 外部　橙色 一部煤付着
70	土師器 釜	口縁部は、やや内傾ぎみに立ちあがり上方で水平に屈曲させる。 鍔もほぼ水平に張り出す。 体部は不明。	口縁部　横ナデ 鍔　〃	胎土　1㎜前後の砂粒を含む 焼成　良好 色調　内部　乳橙色 外部　乳茶色
71	土師器 皿	底部との境で強く屈曲、端部近くで小さく外反する。 内端部は上方へ肥厚	口縁部　横ナデ調整	胎土　良撰　0.1㎜の砂流を含む 焼成　良好 色調　乳橙色
72	土師器 甕	口縁部は強く外反し、端部は上方に高く肥厚させる。	口縁部　横ナデ 体部　上部分に縦方向のハケメ、下部分は欠損のため不明瞭	胎土　良撰 焼成　良好 色調　乳橙色

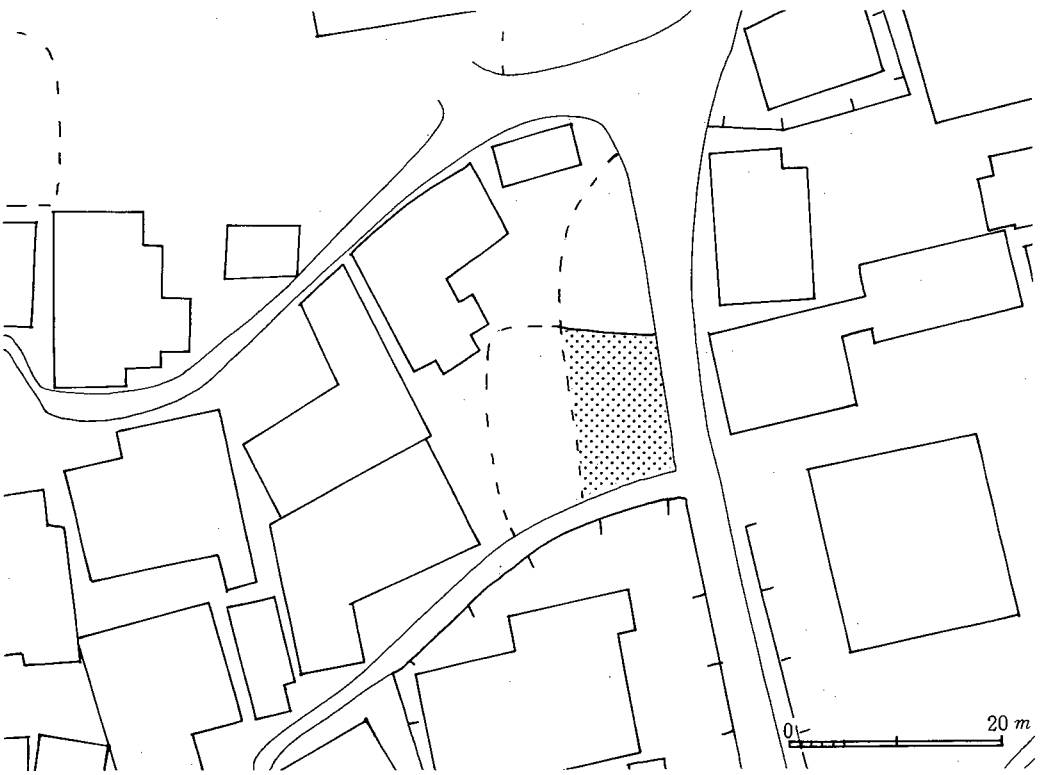
(井坂・森)

4. おわりに

今回の調査において、30余個のピットと古墳時代から平安時代に至る遺物が出土した。ピットは上述したように直径20~30㎝、深さ10~25㎝前後のものと直径40~50㎝ 深さ20~40㎝ のものとに大別できる。しかしピット相互の関係は不明である。又、埋土中より黒色土器A類が出土しており、包含層出土遺物からみても、それに近い時期の可能性を示唆している。又、東トレンチより庄内式併行期の甕底部が1点と、小さな筒状の銅製遺物も出土している。この調査地においては、黒色土器の出土量が圧倒的に少なく、前年行った隣地の調査との大きな差異が認められる。又、北西部においては旧地形が下がらずほぼ同レベルでの面の広がりが確認でき、この平担な面にもピットが検出されたことは、北部の遺構は粗ではあるが西側への広がりは十分に予想される。

2. 木積観音寺跡（79－2）

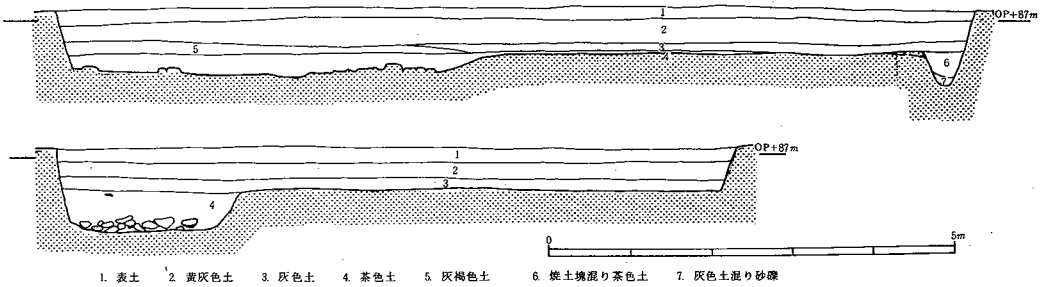
近木川の右岸、中位段丘上に位置する木積観音寺跡は、平安時代の寺院跡として大阪府文化財地名表に記載されている。木積の地は、倭名類聚抄に記載される和泉郡木島郷の地域であり、中世には蕎原、河合、塔原、相川とともに五箇庄と称ぜられた庄園である。木積の地名は『泉州志』によれば行基が畿内に四九院を建立した時にその用材を積み上げたことに由来すると記されており、行基と深い結びつきを伝えている。中世にはのちに岸和田城主となった松浦氏が屋館を構え蛇谷城を築いた。孝恩寺大正５年の大修理の時、大永7年(1527)３月銘の瓦が発見されており、又、字坊城より平安時代末期の瓦が出土している。現在も木積には、上出、下出、南山、男内畑、奥出、小原出の垣内がありそれぞれに村堂ともいうべきものが存在しており、それらの村堂と観音寺との関係も注目されるのである。（南川）



挿図３　木積観音寺跡位置図

1. 層　位

調査区の基本的な層位は、表土、黄灰色土、灰色土、茶色土、黄色土（地山）で、地表から50㎝前後で遺構面となる。ピット、土坑、石敷遺構等が検出された。第4層茶色土からは、瓦、瓦器、土釜、土師質小皿、陶器等が出土している。地山面の標高は86.4～86.7mである。



挿図4　断面実測図

2. 遺　構

検出された遺構は、ピット3、土坑1、石敷遺構1である。

ピット　直径30㎝　深さ15～30㎝を測る。埋土内より土器細片が出土した。

ピット番号	法量（長径×短径×深さ）	埋　土	出　土　遺　物
1	32㎝× 30 × 15	茶色土	瓦器
2	30 × 24 × 30	〃	瓦器、土師質土器
3	30 × 26 × 15	〃	

土坑　調査域南端において一部検出された遺構である。直径2.2m　深さ50㎝を測り、多くの焼土塊と一部焼けた瓦がみられた。又、底部近くでは握掌大の河原石がみられた。

石敷遺構　30～40㎝の河原石が平坦あるいは斜面上にみられた。一部並べられたようなところもみられるが、浮いているような石も多く、石を除去したり、面で広げるような調査ができえなかったため遺構の性格を十分把握できなかった。尚、石の間より玉縁付丸瓦等が出土した。

このほか調査区西部に、河原石と瓦のまじった大きな落ち込み状のものがみられたが近現代の瓦もまじっており、今回は調査を断念した。

3. 遺　物

今回の調査により出土した遺物は、遺物収納箱2箱ほどになる。土釜、土師質小皿、陶器、瓦器のほかはほとんど瓦である。瓦質羽釜は、口径27㎝を測り直立気味の体部から内傾する口縁部の外面に3段を有し、内面はハケ目調整されているもののほか、土師質羽釜も1点出土している。瓦質甕は、球形の体部をもち弯曲外反し口縁端部を丸くおさめたもの、又、短くたちあがった後、外へ折り曲げたものがある。口径30㎝を測り外面には叩き目が施されており、内面はハケ目調整されている。土師質小皿は、口径8㎝、器高1.5㎝を測り、口縁部は内弯気味で丸い端部を有する。玉縁付丸瓦が1点ほぼ完形で出土している。凹面には布目痕が明確にのこり、凸面にもけしてはあるが部分的に縄目痕がみられる。焼成もよく黒灰色でひかっている。ほかにかなり胎土の荒い平瓦等もみられる。又、唐草文の軒平瓦、備前焼と思われる甕や、擂鉢も出土している。

土器番号	器種	形態	手法	備考
1	土師質小皿	端部は内彎しながら立ちあがり口縁端部は丸い。内面は底部が稜のように盛りあがっている。	口縁部は内外共に横ナデ 底部　内面　仕上げナデ 外面　無調整 指おさえ	胎土　良撰0.5～1㎜程度の砂粒含有 焼成　良好 色調　黄茶褐色
2	土師質皿	口縁部は底部からのゆるやかなカーブで立上り、反転はほとんどない。端部は丸い。 底部は、中心部が窪みになっている。	内部の口縁と底の間は指おさえが施されている 全体に横ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　外　茶褐色の表面がはく離して乳白色 内　淡乳褐色
3	瓦質小皿	ごく浅く　底部～口縁部の境は不明瞭 口縁端部は丸い	口縁部　横ナデ 底部　内面　ナデ 外面　無調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　口縁部のみ黒灰色 他は淡灰色
4	瓦質土釜	口縁部は内傾して立ちあがり、外側に段を持つ。端部は内側へ短かく折り返す 鍔は上方へゆるく彎曲。	鍔下面～口縁外面にかけて横ナデ 体部外面はヘラケズリ、内面は横ハケメが残るが密なものではない。	胎土　微細な砂を含む 焼成　良好 色調　表面黒灰色　断面淡黄褐色 胎土は完全な瓦質になっていない
5	土師質土釜	口縁部は有段で、上端はやや外側に傾く平面に仕上げ、内端部を強く肥厚させている。つばから口縁までの間に段が2つある。つばは2.5㎝巾で上向きになっている。	体部は、ヘラケズリ つばは、ヨコナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　外　灰色 内　淡褐色
6	瓦質甕	←縁部は短かく立ちあがった後外へ強く折り曲げる。 端部は丸くやや下垂している 器厚は約1.1㎝と厚い	胴部外面　平行タタキメ 口縁部　横ナデ 内面　表面はく離	胎土　良撰　0.5㎜程度の砂粒含 焼成　良好 色調　灰黒色
7	瓦質甕	肩部は、ゆるやかな丸味をもつ。 口縁部は短かく立ち上がった後、横に強く折り曲げるが、端部の巻きこみは見られない。	口縁部　内外ともに横ナデ 胴部　内部ハケメ　1㎝巾　右から左方向、左から右上げ 外部　タタキメ 3×4㎝　3㎜巾	胎土　良撰 焼成　良好 色調　淡灰色
8	瓦質甕	胴部と底部の区画線がはっきりと分けられる。胴部はほぼ直線に外傾している。底部は平らであろうと思われる。底部中心と胴上部、欠損。外部は表面のはく離が著しく、表面部分は、わずかしか残っていない。	内面　ハケメ	胎土　0.1～3㎜の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黒灰色 断面　灰白色

土器番号	器種	形態	手法	備考
9	土師質 擂鉢 ？	すり鉢としては通有の形態である 口縁端は若干外側へ肥厚させる 体部は湾曲がごく小さい	内部 4 ㎝巾のハケメ 下から上、右から左へ調整した後 6 ㎝巾(3㎜)のハケメが入っている。 口縁部 横ナデ ナデ調整 外部 ヘラケズリ	胎土 良撰 焼成 良好 色調 内部 茶灰色 外部 (体部 灰黒色 口縁 茶灰色
10	甕 (備前焼)	ほぼ平担な底部を持つと思われる	内部 ハケメ 右～左方向 2.5 ㎝巾 右下～左上 2 ㎜間かく 外部 ハケメ 底部外周 ヘラケズリ	胎土 1～5 ㎜の砂粒を含む 焼成 良好 色調 外 赤褐色 内 灰褐色
11	土師質 土釜	口縁部と胴下部 欠損のため不明 胴部に 2 ㎝程の上向きのつばがついている。有段の口縁を持つ	胴部 内面は粗いハケメの後指ヨコナデ 仕上げ 外面はヨコヘラ削りの後、左上がりのヘラ削り有る 一部に指圧痕 つばの上面はヨコナデ	胎土 良撰 焼成 良好 色調 外 橙褐色 口縁部とつばの裏にススが付着 内 橙褐色～茶褐色
12	平瓦		一枚造。凸面側は離れ砂が著しく付着糸切り痕だけが見てとれる状態。 凹面側は部分的に布目と糸切り痕を残す他、雑な縦のナデを加える。 側面、端部ともヘラケズリで仕上、凹面側の端部に巾 3 ㎝、側面側端部に 5 ㎜巾の面取りを施す。	胎土 砂礫(1～5 ㎜)を含み粗雑。 焼成 良好 色調 灰色
13	丸瓦	長さが短く、玉縁の先細りの程度が大きい。	内面布目 外面は縦の縄タタキをすり消し、端面は、側縁と前線の凹面側をヘラケズリ	胎土 砂が多く荒い 焼成 良好 色調 表面 黒灰色 外面 灰色 いぶし焼き
14	軒平瓦	線の細い唐草文を配し、周縁は高い。 平瓦接合面から割れていて、上半部は不明である。 断面は段顎となるが、平瓦部分へは曲線を描いて移行する	顎下面は横(瓦当面沿い)のナデ 顎の裏から平瓦部へかけては縦のナデ	胎土 細砂、黒色粒を含む 焼成 良好 色調 表面 黒灰色 断面 灰白色

(北田・森)

おわりに

今回の調査では、明確な遺構は検出しえなかったが、ピットはもちろん調査域南端において検出した焼土塊、焼けた瓦等を含んだ土坑、北側での石敷風の河原石が多く存在する遺構、又、遺物も、瓦、羽釜、小皿、甕等の中世遺物が若干ではあるが出土しており、観音寺の創建にかかわるような資料は得られなかったものの中世末期の修理、豊臣秀吉の根来攻伐等の記録に近い時期の資料を得たことは、今後の調査に多くの問題を提起している。

観音寺の寺伝と開創期

観音堂はもと深谷山観音寺と号し、寺伝によれば神亀 3 年(726)行基の創建にして自刻の観音像を安置したと伝えられるが、この寺伝を傍証する確実な

史料はみあたらない。おそらく後世に行基と観音信仰を結びつけて造出された開創縁起であろうが、いつ頃造出され成立したものかを検討したい。

観音寺の縁起について、地誌には次のように記されている。

延宝9年(1681)の和泉国村々名所旧跡附[註1]には「観音寺本堂行基菩薩五十九歳神亀三年に御建立也　則御作之佛廿一尊有之　此堂飛驒名匠造る」　元禄13年刊の泉州志[註2]には「観音寺　在木積村　縁起云行基畿内建四十九院其材木盡從和泉國木嶋杣山當境者即置其材木地也故号木積也行基自雕刻觀音像安此地　余按萬葉集多詠木積同二十糞訓古津养疑木積糞之失木字歟木糞木屑也歌林良材木積註浮水埃是亦木屑義歟顧念當地者昔行基置木屑地也」、また同時期の写本といわれる江戸時代に於ける和泉地方の農事調査書[註3]に「和泉三拾三所順礼、正観音、観音堂に有り廿五番／神亀三年行基五拾九歳の時建立。行基の作仏廿一躰有り。堂は飛弾内匠の作／『一観音堂は神亀三年行基五十九歳の時建立、行基作仏廿一体あり。今の堂は飛驒の内匠建候堂也。行基畿内に四十九院を建て、其材木を積置く地也。故に木積と云う。／一和泉国三十三所順礼第二十五番正観音　観音堂／詠歌に一枝を手向く心の花なれや木積の堂と聞につけては。／是より奥、男内畑村にも一宇の観音あり、奇瑞の観音也。』」これらの地誌の記載によって、17世紀の後半には行基開創の縁起が成立して宣伝されていたことが知られ、この寺伝縁起の造出が近世初頭か早ければ中世にまでさかのぼりうることが考えられる。またこの縁起の造出と成立は、和泉西国三十三所霊場の成立と無関係ではないことが考えられる。すなわち三十三所霊所のほとんどの寺院が行基の開創かその関係を伝えているのである。

観音寺の山号深谷山は、もと境内に所在した深谷神社に由来することが考えられる。この深谷神社は承和4年(1102)の勧請で天神・公頭大明神・牛頭天王の三神を祭神とする木積の総氏神であった。明治43年8月に西葛城村内の神社を合祀合併し、社名を西葛城神社と改称し、社地を現在地に移した。この神社の宮座は畑座・上座・本座(もと下座)の三座があり宮座の行ないはすべて観音堂において行われていた。承和4年の勧請については今日これを傍証する史料はない。現存の仏像群に平安時代前期の様式のものがあることからすれば

深谷神社は観音寺の鎮守社として勧請されたと考えることができる。

これまで観音寺の寺域および周辺からは、平安時代はおろか鎌倉時代の屋根瓦も検出されていないところから現在地に創建時より所在したとは考えられず、他にもとめるのが適当であろうと思われる。創建時の寺域はかなりの規模であったことは現存の仏像群からも明らかであり、木積の集落地に院坊が散在していたことであろう。木積地域における屋瓦の出土地としては、当寺より南東約570メートルに位置する字坊城がある。1974年7月の試掘調査によって平安時代後期から鎌倉時代の屋瓦が出土しており、近辺の地蔵堂、一石五輪塔群から察して寺院が存在したことが知られ、観音寺に関係する坊院跡とも考えることができる。木積の垣内ごとに大日堂、地蔵堂等の小堂が現存しているが、これらの小堂は観音寺の院坊ではなかったかと考えられるのである。このように、創建時を語る確実な史料が見当らない観音寺ではあるが、堂内に安置される平安時代前期から後期の様式を示す仏像群と、いくつかの関連ある史料とによって創建時期を追求することができるのである。（南川）

註 1.『和泉国村々名所旧跡附』　小谷方明編　昭和11年刊

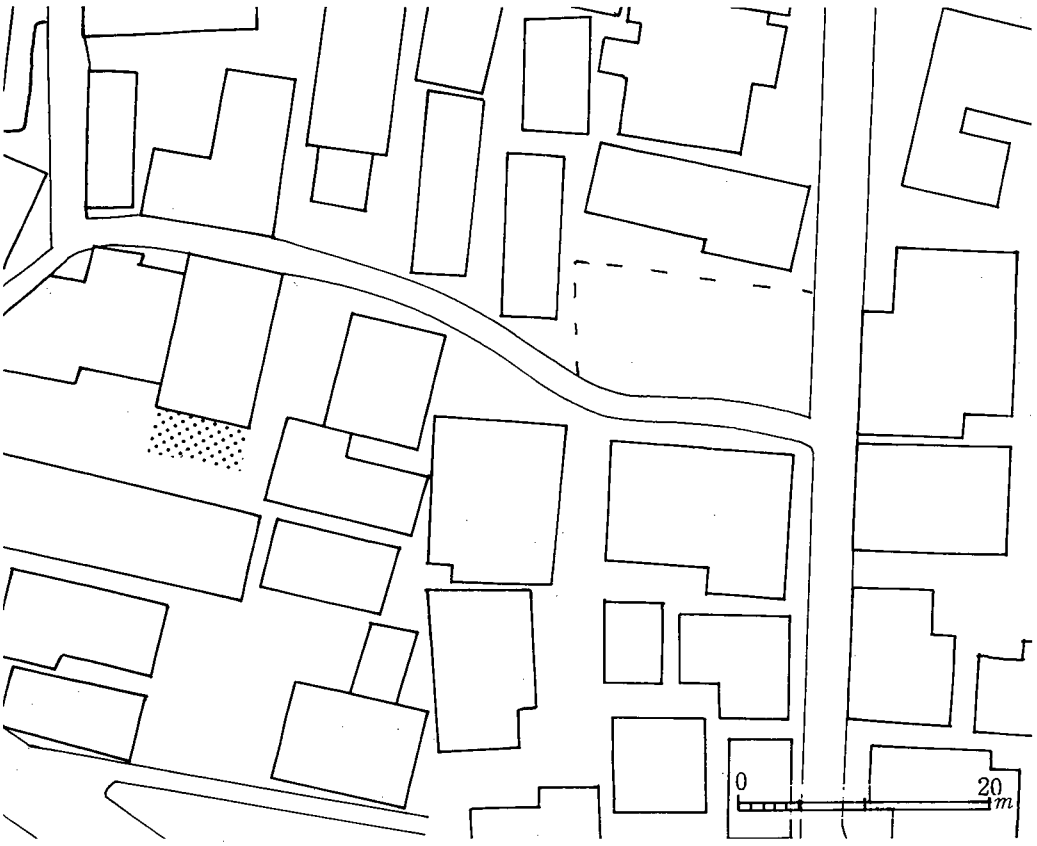
註 2.『泉州志』　石橋直之著　元禄13年

註 3.「江戸時代に於ける和泉地方の農事調査書」『和泉志』第32～35 合併号
出口神暁編　昭和42年

3. 秦　廃　寺　跡（79－3）

津田川の下流左岸の低位段丘上に位置する秦廃寺跡は、白鳳期の瓦の出土する寺院跡として広く周知されている。京都太秦広隆寺所蔵の「広隆寺末寺并別院記」によると天武天皇8年(680) 11月、秦勝賀佐枝により建立されたものと記載されている。半田村東方にあった麻生河王子神社が明治42年に久保の阿理莫神社に合祀され、その跡地の開墾により多くの瓦が出土したといわれている。今回の調査地は、遺跡の東部で半田字麻生川と呼ばれ、住宅の増改築工事

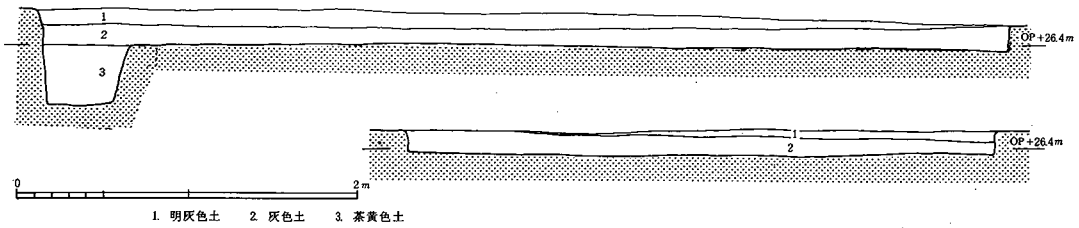
が計画され、その事前調査を実施したものである。調査面積は約20㎡である。



挿図5　　位　置　図

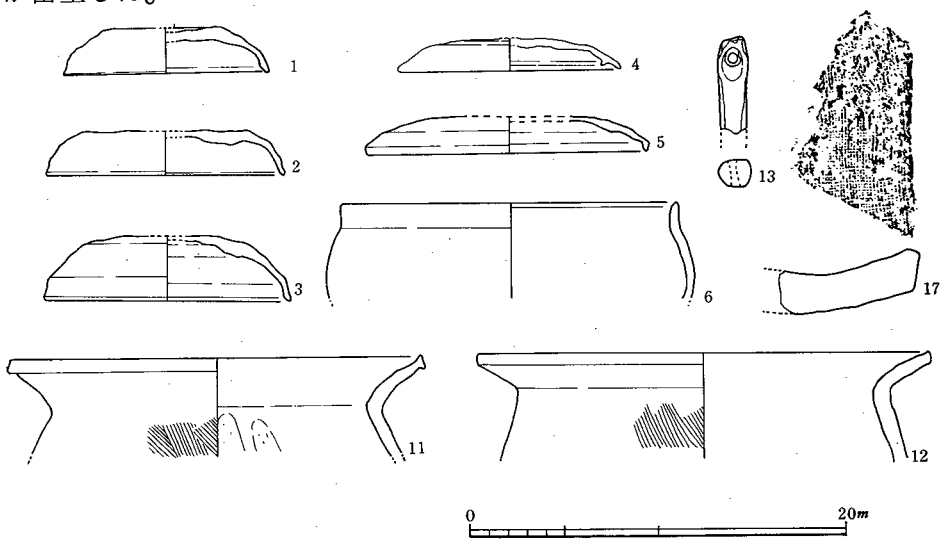
1.　層位と遺構・遺物

上述したように調査地一帯は既に宅地化されており、田畑の残っているところは東部に一部みられるだけである。比較的高いレベルにあるこのあたりも、表土、灰色土、茶黄色土（地山）となり、地表より約30㎝で遺構面となる。2層とも遺物はほとんど出土しなかった。標高は26.3m前後である。



挿図6　　断面実測図

地山面より楕円形の径2.2m×1.9m、深さ約50cmを測るピットを検出した。埋土中より7世紀後半～8世紀の土師器、須恵器、瓦等の遺物が出土した。須恵器坏蓋は、口縁部が垂直に立ちあがり天井部をかるくヘラ削りした口径13cm、器高3.5cmのもの、口径15cm 器高2.5cm位のつまみのつく返りのない蓋、口径12cmの返りをもつが口縁端部まで返らないもの等がみられる。又、土師器甕は口縁部がくの字型に外反し端部をややつまみあげ、体部外面に斜め方向のこまかいハケ目を入れ、内面にはヘラ削りを施したものがみられる。そのほか、棒状の土師質土錘、高坏脚部、焼きのよい凸面縄目、凹面布目痕のみられる平瓦片等が出土した。



挿図7　遺物実測図

土器番号	器種	形態	手法	備考
1	須恵器 坏(蓋)	天井部は平担で、体側部～口縁部にかけては丸味をおびる 口縁端部は、やや薄くなって丸くおさめる。	内面天井部は、不定方向のナデ調整 外面天井部は不調整 外面回転ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　青灰色
2	須恵器 坏(蓋)	天井部はほぼ平担、体側部～口縁部は比較的強い丸味をもち、口縁端部は丸くおさまる。 端部の外側にごく浅い凹線が入る。	内面　回転ナデ 外面　天井部はほとんどヘラ切のまま（上から少しナデる） 口縁部は回転ナデ	胎土　良撰1㎜の砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰色 自然釉付着 内部に一部れきが表出
3	須恵器 坏(蓋)	天井部はほぼ平担、体側部は丸味が弱く、強く屈曲してから、わずかに外反する口縁部に移る。 端部は丸くおさめる。	天井部　ヘラ切り後浅いナデ 他は、回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　灰色

（上西・森）

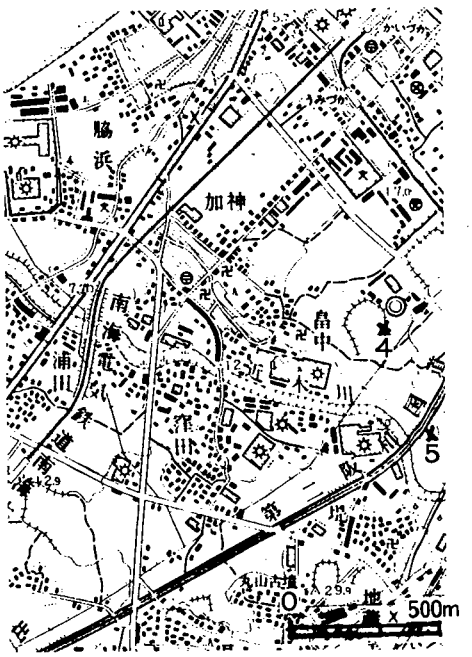
土器番号	器種	形態	手法	備考
4	須恵器 坏(蓋)	天井部は比較的丸味をおび、そのまま口縁部に移行。 かえりの端部は鋭く、口縁端部より内側に入っている。	天井部外面は、回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整 天井部内面は回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　内面は明灰色 外面は灰色 1㎜程度の砂粒を含む
5	須恵器 坏(蓋)	比較的丸味の強い天井部を有し、口縁端部は内下方に強く折り返すが、稜はにぶい。	回転ナデ調整	胎土　良撰 焼成　良好 色調　内部は灰黒色 外部は灰色に自然釉付着 (灰かぶり状)
6	須恵器 鉢	口縁部は短かく直立、体部との境はくびれが甘く不明瞭。 体部はほとんど肩が張らず、全体として、扁球形に近いものになると思われる。	全面回転ナデ	胎土　良撰 焼成　良好 色調　淡灰～灰白色
7	須恵器 坏(蓋)	平担な天井部を持ち、体側部は丸味をおびる。口縁部はほぼ直立、端部は丸くおさめる。	天井部はヘラ切りのまま 他は、回転ナデ仕上	胎土　良撰 焼成　良好 色調　淡灰色
8	須恵器 坏(身)	口縁部の小片、受け部は側方へ強く張り出して反転し、立ち上がり部は低く端部は比較的鋭い。	回転ナデ仕上	胎土　白色砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰～青灰色
9	須恵器 鉢(有蓋)	丸く比較的深い体部を持つ、坏状の鉢。立ちあがり部は欠失する。 受け部は、外上方へ張り出し端はシャープに仕上る	回転ナデ仕上	胎土　精緻 焼成　良好 色調　内部－淡灰色 外部－黒灰色
11	土師器 甕	口縁部は、くの字型に屈曲外反し端部は上方へつまみ上げられる。 胴部は、上部がわずかに遺存他は欠損	口縁部内面は、横ナデ、下にハケ目がある。外面は横ナデ 胴部外面は斜ハケメ、内面は指圧→ハケメ(横)→ヘラ削りの順に仕上	胎土　良撰1㎜前後の砂粒を含む 焼成　良好 色調　外部－赤乳色 内部－乳橙色
12	土師器 甕	外反の強いくの字型口縁を持ち、端部は外傾する平面となり上端と下端がそれぞれつまみ出される。 球形に近い体部を持つと思われるが肩部以外残っていない。	口縁外面は横ナデ、同内面は横ハケメの上を横ナデ 体部外面は斜ハケメ、内面は一旦横ハケメで調整した後ヘラケズリを加える	胎土　細砂を多く含む 焼成　良好 色調　淡橙赤色
13	土師質 棒状土錘	円棒状の錘体の端部寄りに穴をあけるもの。 2/3程度残る	端部は押さえてやや平担にした後、一方から穿孔、端面はヘラでカット	胎土　良撰 焼成　良好 色調　乳橙色
14	土師器 坏	口縁部の小片、口縁部は急な角度で立ち上り、端部で小さく外反し薄くなって丸くおさめられる。 に放射状暗文、外面体側部にも横方向のヘラミガキ線が少しある。	内面は横ナデ、外面も同様だが、下方でヘラ削りを施す	胎土　良撰 焼成　良好 色調　橙赤色
15	土師器 高坏	坏部は欠損。脚は下方で大きく開き、 柱部も下広がりになっている。	坏部と脚の接合は、坏底部に脚の上端を接し、接合部外周に補強粘土を巻いて指で粘土をのばしていく方法。この際脚はハケメ調整まで済んだものを使っている。これは補強粘土のはみ出し部分が一部脚の柱部のハケメにかぶさっていることでわかる。　脚は絞って成形、柱部外面と裾部内面はハケメ、柱部内側には絞り目が残る。	胎土　良撰 焼成　良好 色調　橙赤色
16	土師器 把手	体部が残らないため、どのような器種につくのか不明。 把手自体は充分に側方へ張り出し、斜上方へ折りまげられた実用的なもの。	把手の接合は器体外表に接着する方法を取る。把手付近はナデ。器の体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで部分的にナデたように平滑なところがある。	胎土　良撰 焼成　良好 色調　乳橙色
17	平瓦		凸面は縄タタキ(縦)で、離れ砂(白色)をかけている。凹面側は布目。 側縁はヘラケズリで、凹面側端部を狭く面取りする。　一枚造。	胎土　良撰 焼成　堅緻 色調　灰色　表は　縄叩き目 裏は　布目痕あり 若干　砂粒あり
18	平瓦		凸面側は、横方向に板でナデ仕上る。 裏面は布目が残るが、斜方向についている一枚造、桶巻造の別不明。	胎土　良撰 焼成　不良 色調　乳褐色

2. ま と め

大阪府文化財分布図によると、秦廃寺跡は、字麻生川を中心に載せられているが、範囲は不詳の円が施されている。中心地周辺はほとんど半田の村落として住宅が建ちならぶが、東方にはまだ田畑がみられるところがある。今回の調査により現集落内においても、住宅の建て替え時に発掘調査を行っていけば、十分遺跡を把握しうる資料が確認できることがわかった。又、出土遺物より、秦廃寺の存続年代を求めることも可能であるが、今回は遺構の1部が検出されただけで、これが秦寺の柱穴の1つだと決めつけるわけにいかず今後の周辺地域の調査により、建物跡等の遺構と遺物の発見をまち、判断していきたい。付近には、海岸寺山須恵器窯跡、半田遺跡等、同時の遺跡が数多くあり、早急な調査により範囲、性格等を把握し、保存処置を講ずることができるようにしてゆきたい。

4. 加治・神前・畠中遺跡（79－4）

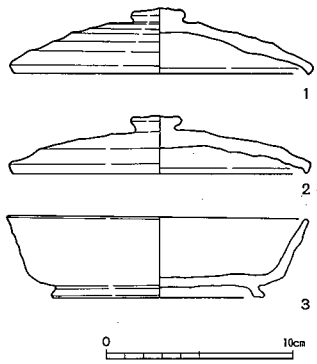
遺跡の中央やや東、市庁舎の南コモ池にてコンクリート根固工事に立ち会った。池内130m余行われたが、東側で一部包含層の残っていたところがあった。コンクリートの周壁下より、灰黄色土(40cm)灰褐色土（20cm）、黄色土（地山）と続く。灰褐色土は須恵器、土師器を包含する層である。坏蓋(1)は、天井部がゆるい曲面をなしヘラ削りで調整した後、扁平なつまみを貼付ける。口縁端部は断面三角状に下方へ突出する。1～3mmの砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質、淡灰色～



挿図8　位置図

灰白色を呈す。坏蓋(2)は、天井部がやや浅く段をなすようにして口縁部に至る。口縁端部は断面三角状に下方へやや短く突出する。天井部中央に扁平なつまみを有す。内外面とも回転ナデ調整され、胎土は(1)同様砂粒を含むが、焼成は良好で、暗灰色（外面）、淡灰色（内面）を呈す。

高台付坏(3)は、体部は外反して立ちあがり外上方へのび、端部は丸い。底部は平底を呈し、体部との境よりやや内側に外弯気味に踏んばった高台を有す。1㎜前後の砂粒を含むが焼成は良好で青灰色を呈す。



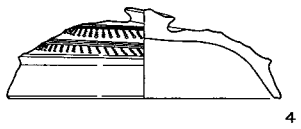


図9　遺物実測図

5. 加治・神前・畠中遺跡（79－5）

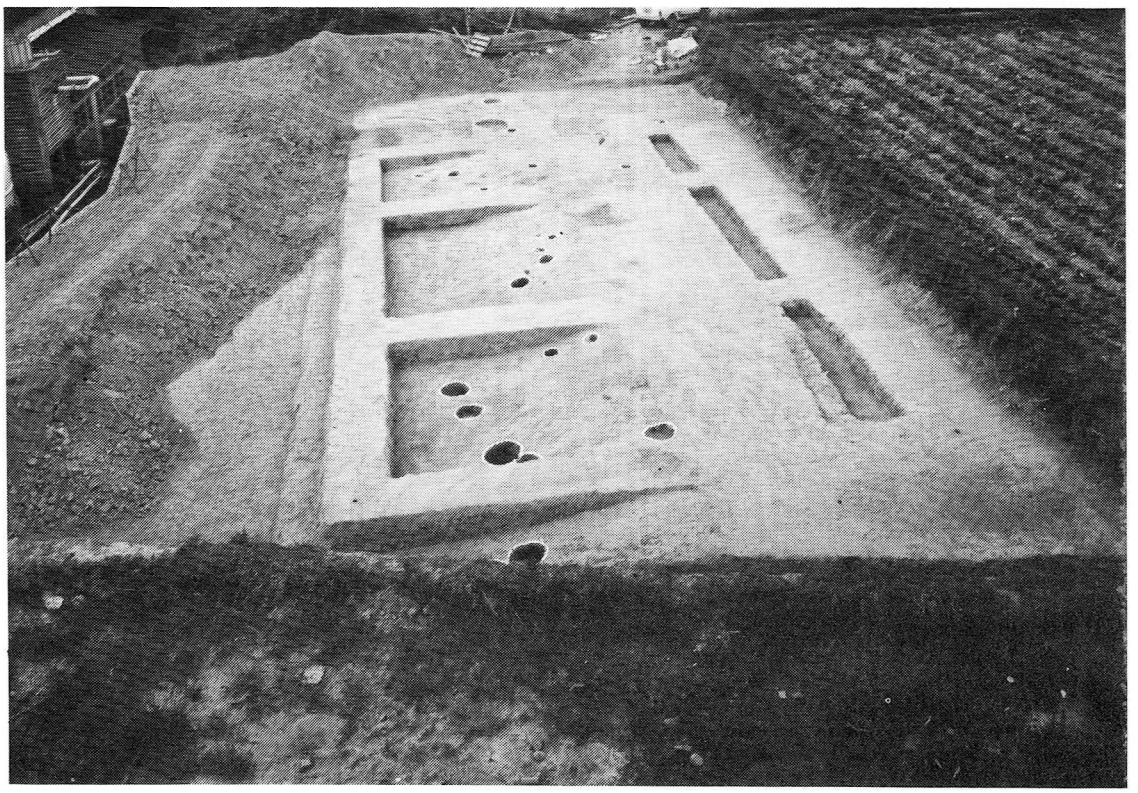
遺跡の東端、第2阪和国道の東にあたり、石才字戸ノツボ、近木道と呼ばれている。盛土工事の事前調査である。1,000㎡内に、10ケ所の試掘トレンチを設定したが、下段の西端トレンチにおいて遺物を包含する層があった。層序は埋土、旧耕作土、床土、灰褐色土、暗灰色粘質土、灰色砂礫と続く。灰褐色土層は中世遺物の細片を、暗灰色粘質土層は須恵器、土師器を若干包含し、現地表より60～80㎝の深さを測る。坏蓋(4)は、天井部はややふくらみをもち、中心につまみがつく。口縁部との境には稜が水平方向に突出する。口縁部は外反し端部は平面を形成する。つまみは比較的扁平で上面が窪み中心部分にわずかな突出をもつ。天井部には櫛刺突文と直線文を交互に2段ずつ施す。回転ナデ調整され、胎土は良撰、焼成良好、黒灰色を呈し、天井部内面に暗緑色の自然釉がかかっており、さかさにして焼成している。

前述したように市域には範囲、性格の不明確な遺跡が数多くある。また、調査を行い出して2年であるためか、調査の前・中・後といろいろ工事主体者等との問題がみられるのが現状である。じっくり、ゆっくりかもしれぬが。

図　　版

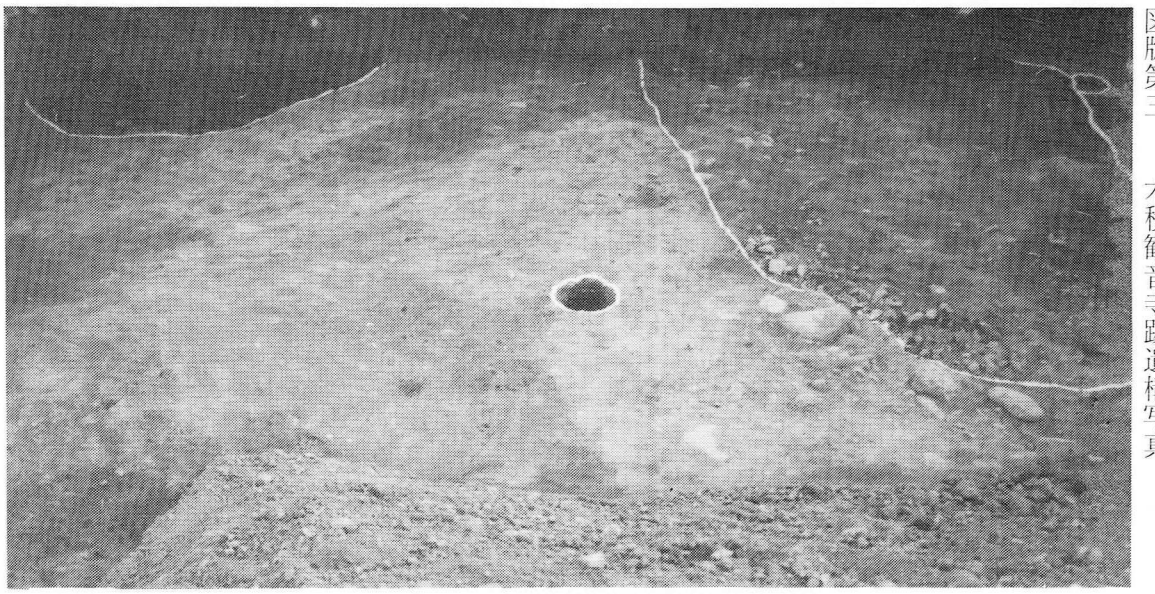
図版第一　遺跡周辺航空写真

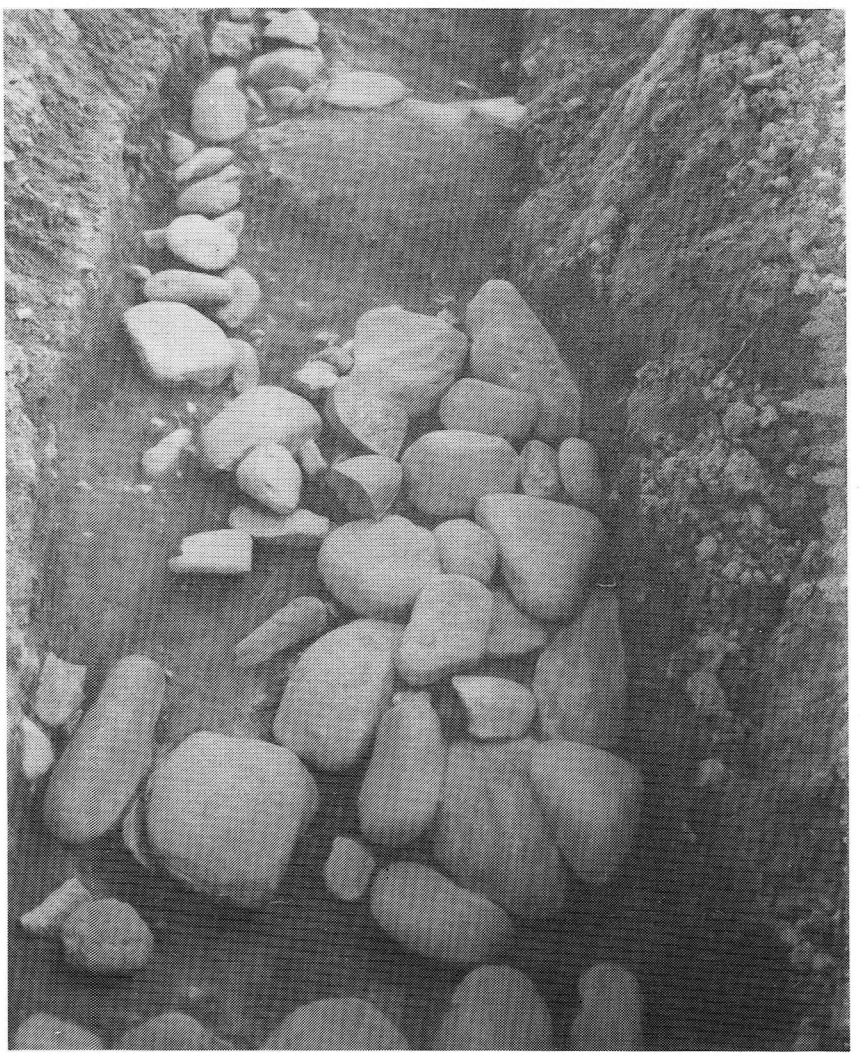
遠景　（調査前）



全景

図版第三　木積観音寺跡遺構写真

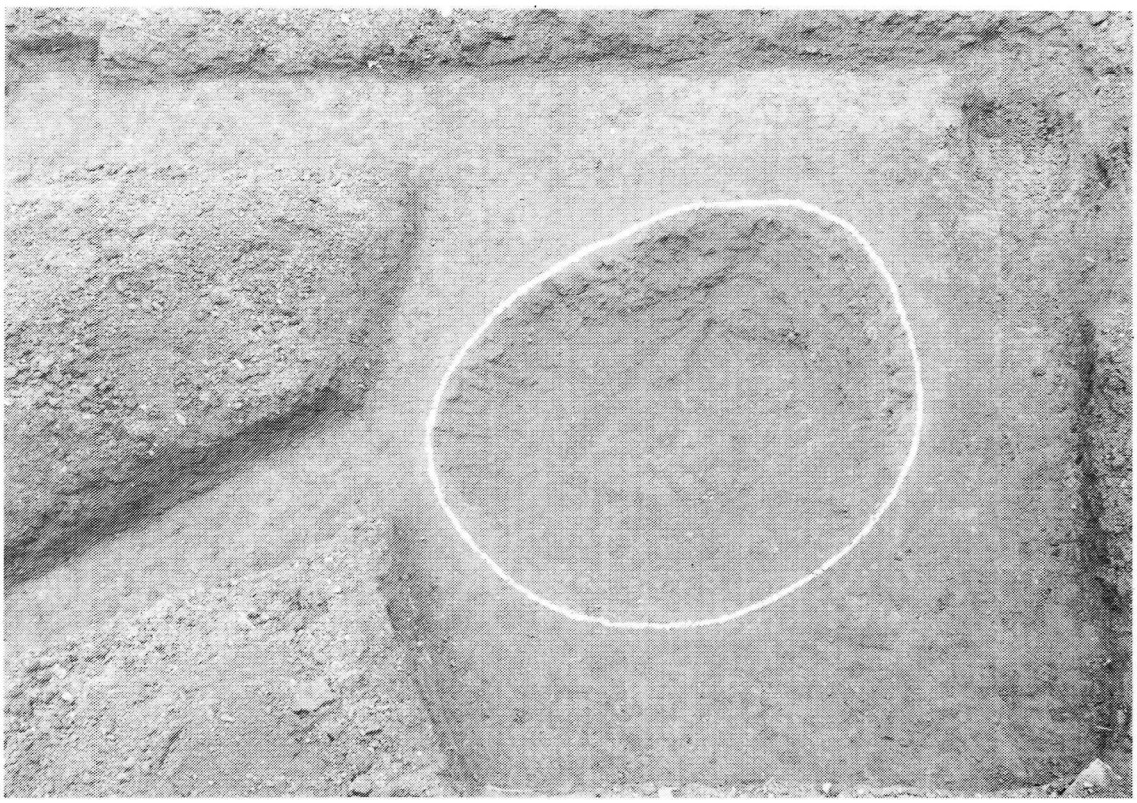




北より

図版第四　木積観音寺跡・秦廃寺跡遺構写真

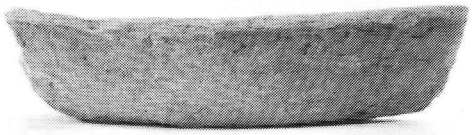
木積観音寺跡　　土坑



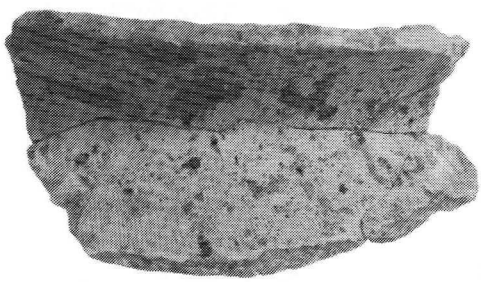
秦廃寺跡　　全景

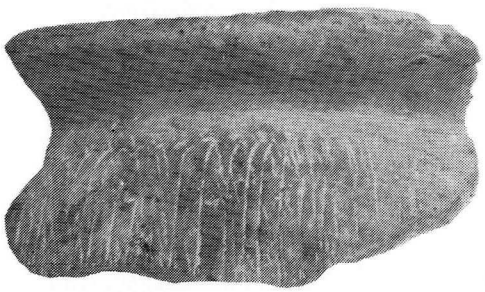
63

54

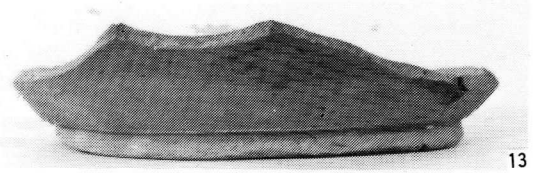

52

64


67

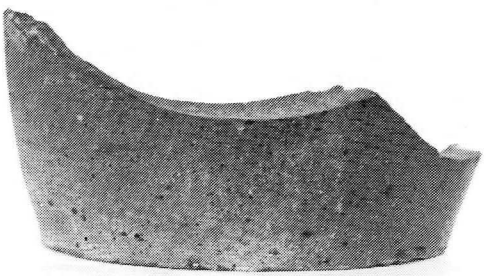

65

68

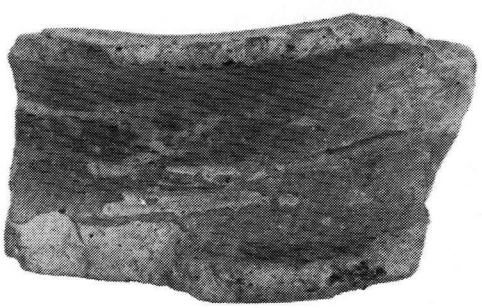

13

5

18


9

8

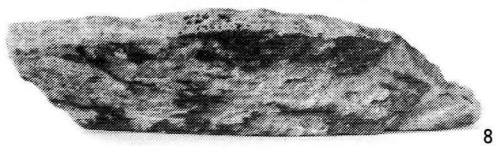

70

図版第六　木積観音寺跡遺物写真

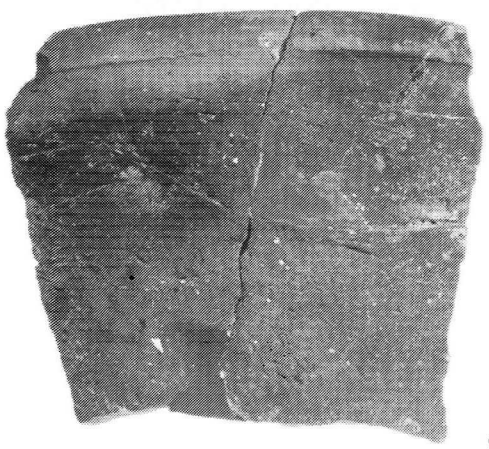
1

6

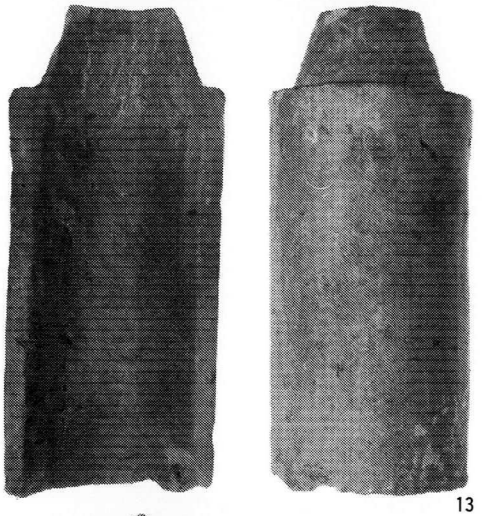
7

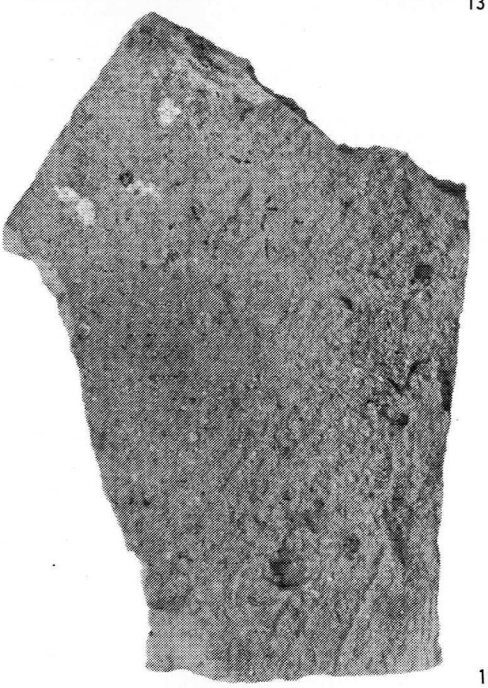

8

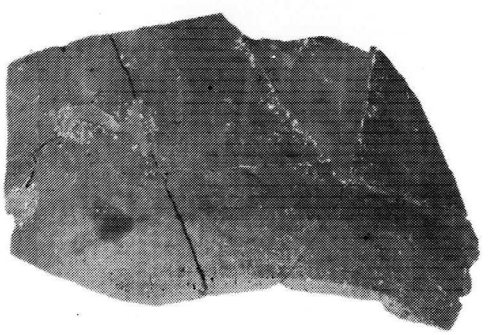
5


9

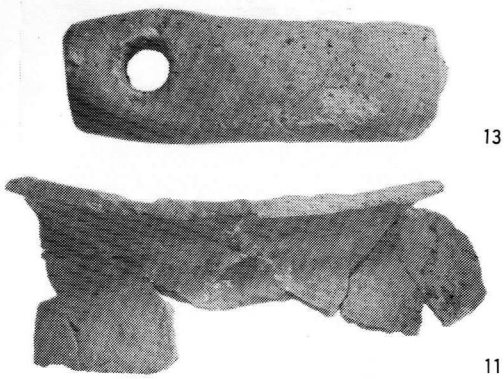
14


13

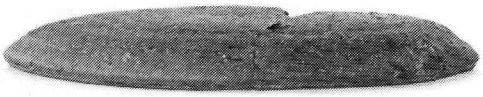

12


10

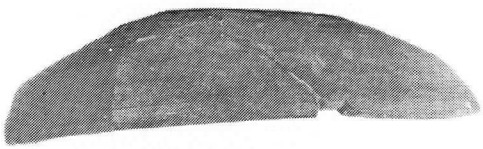
図版第七　秦廃寺跡遺物写真


13

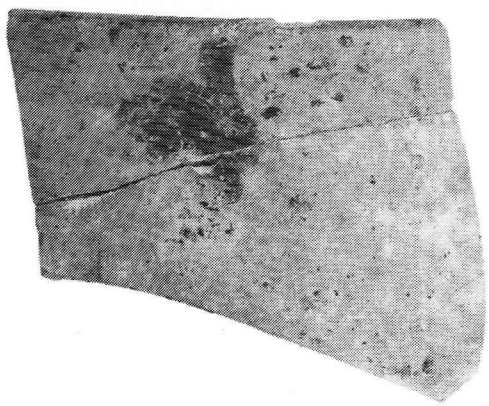
11


5

2

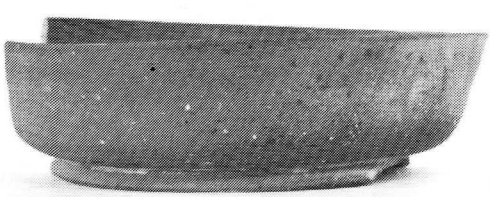

1

17


6

4

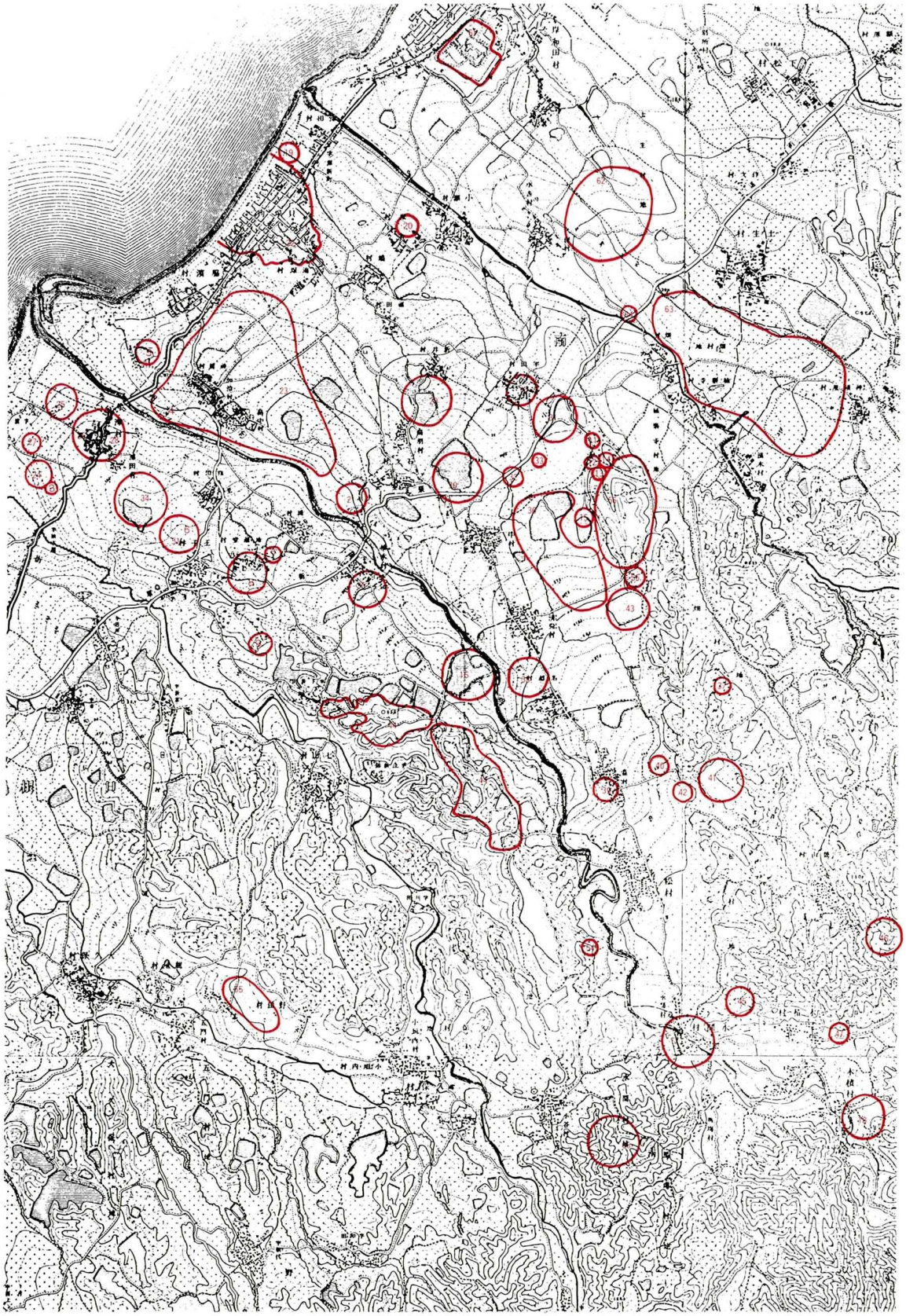
2


3

5

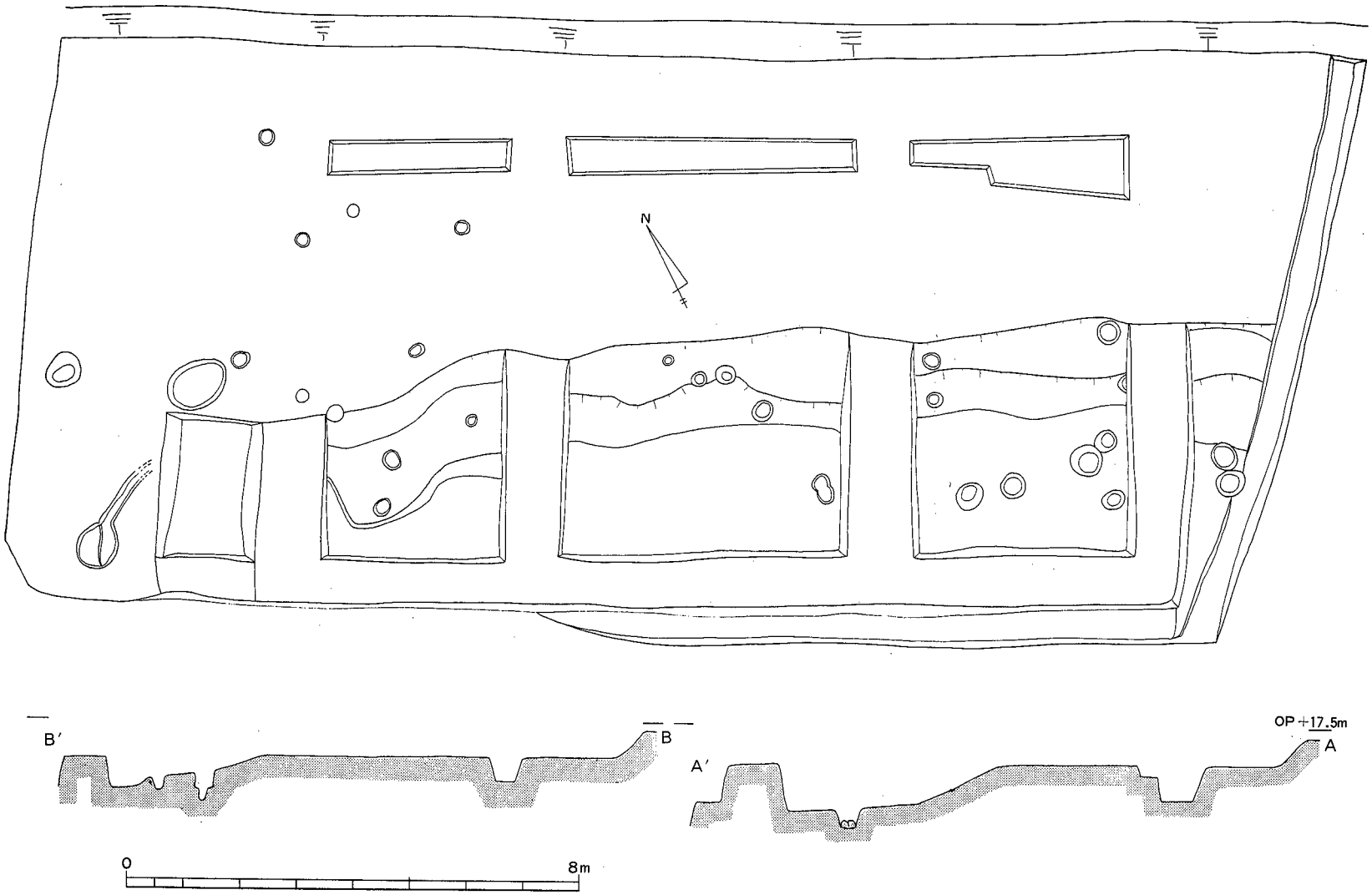
1～17秦廃寺出土　2～4加治・神前・畠中遺跡　5貝塚寺内町

図版第八　遺跡分布図



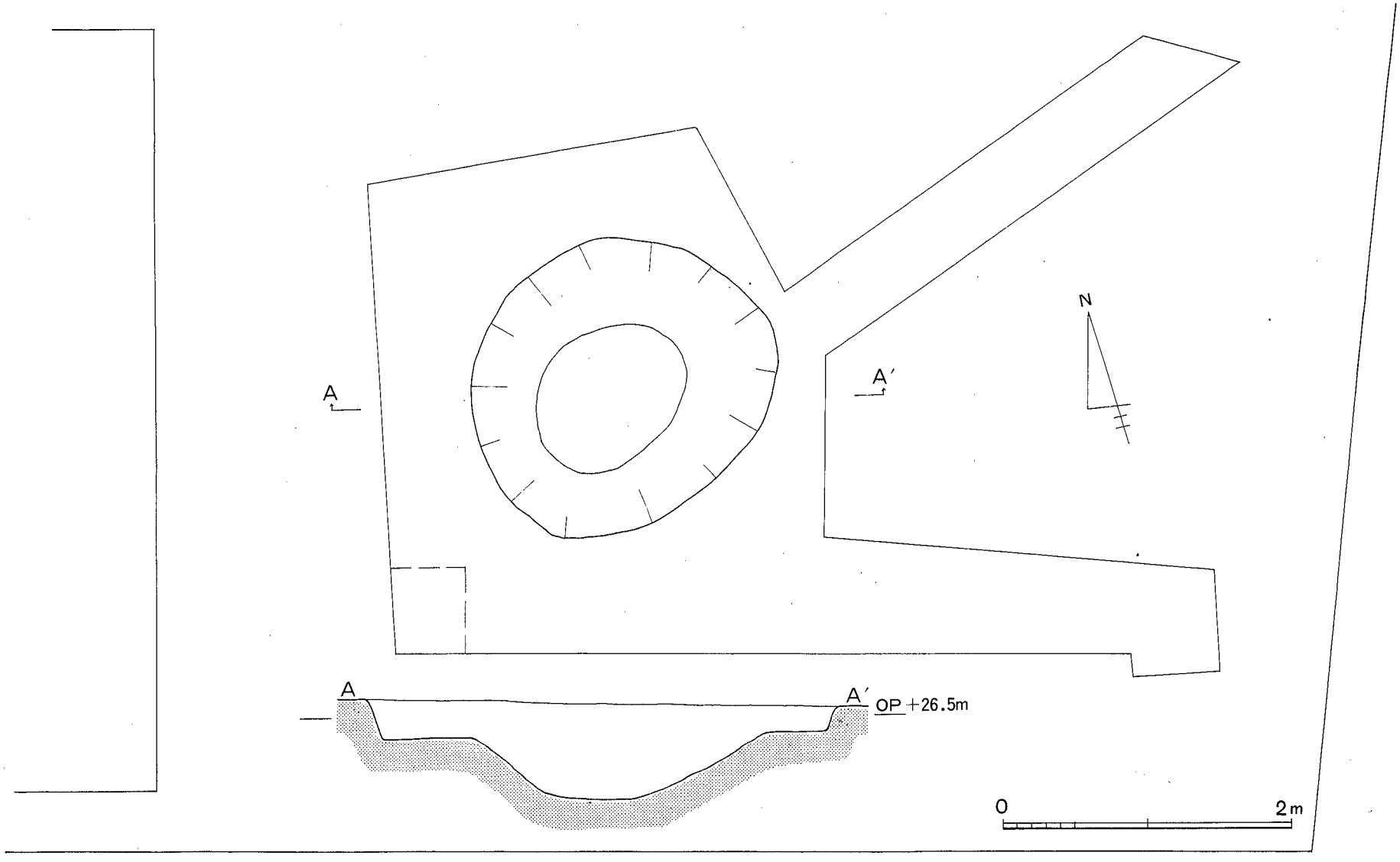
3沢遺跡　4加治神前遺跡　5長楽寺跡　6窪田廃寺跡　7丸山古墳　8地蔵堂廃寺跡　9下新出遺跡　10泰廃寺跡　11海岸寺山須恵器窯跡　12海岸寺山墳墓遺跡　13海岸寺山南須恵器窯跡群　14海岸寺山古墳　15麻生中新池遺跡　16河池遺跡　17水間寺　18木積観音寺跡　19泉州麻生塩委出土地　20堀遺跡　21橋本遺跡　22貝塚寺内町　23加治・神前・畠中遺跡　24廃明楽寺跡　25沢共同墓地遺跡　26沢西出遺跡　27沢海岸北遺跡　28沢城跡　29新井・鳥羽遺跡　30新井ノ池遺跡　31半田遺跡　32麻生中遺跡　33半田一里塚　34澱池遺跡　35積善寺城跡　36清児遺跡　37集原池遺跡　38高井天神廃寺跡・高井城跡　39森城跡　40森B遺跡　41森ノ大池遺跡　42森A遺跡　43二ッ池遺跡　44千石堀城跡　45水間墓地　46三ヶ山城跡　47片山墓地　51窪田遺跡　54三ッ松遺跡　55槍ヶ谷城跡　56半田遺跡（海岸寺山）　61岸和田城跡　62土出遺跡　63畑町遺跡　64今城跡　65高蔵寺城跡

図版第九　調査地位置図

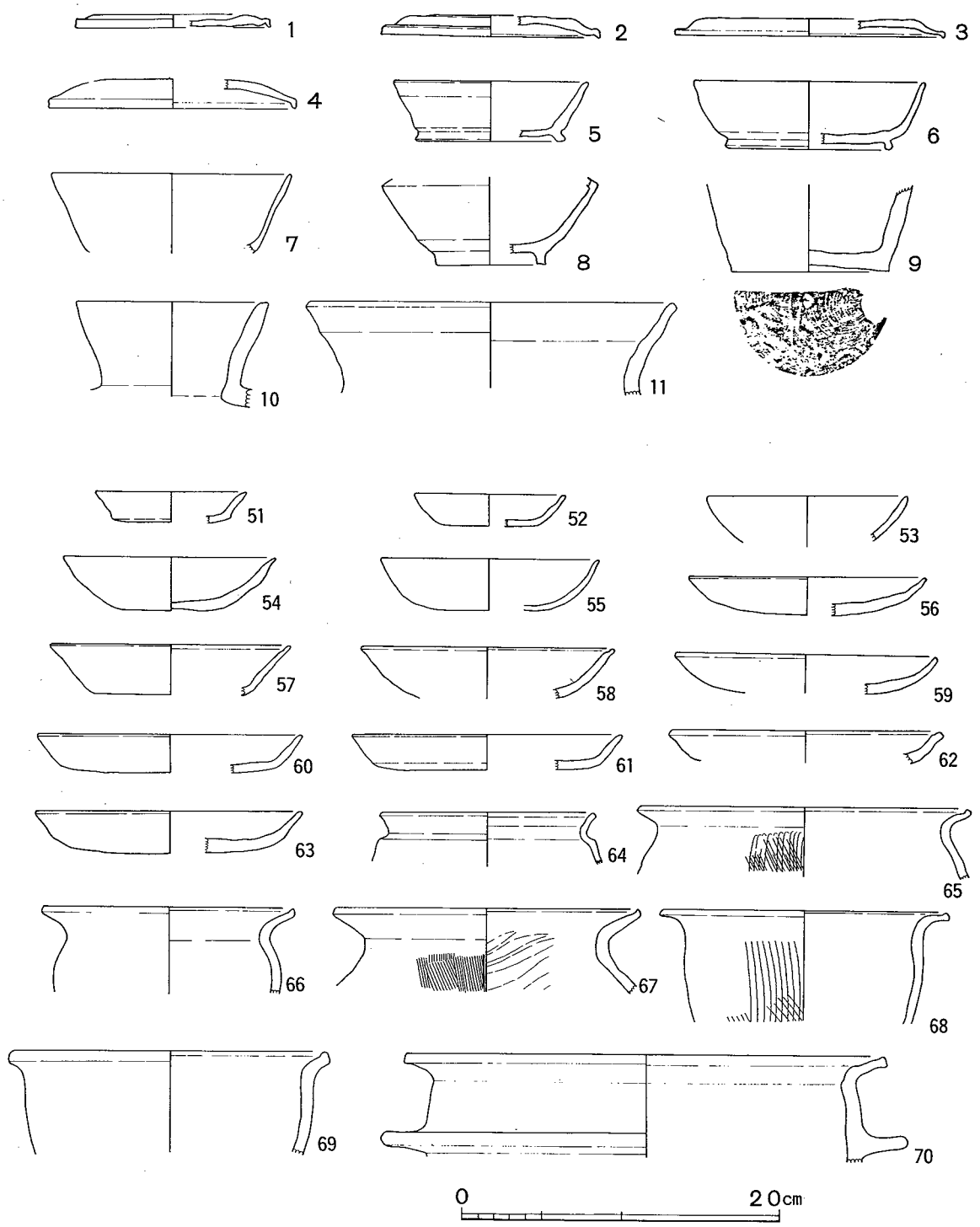


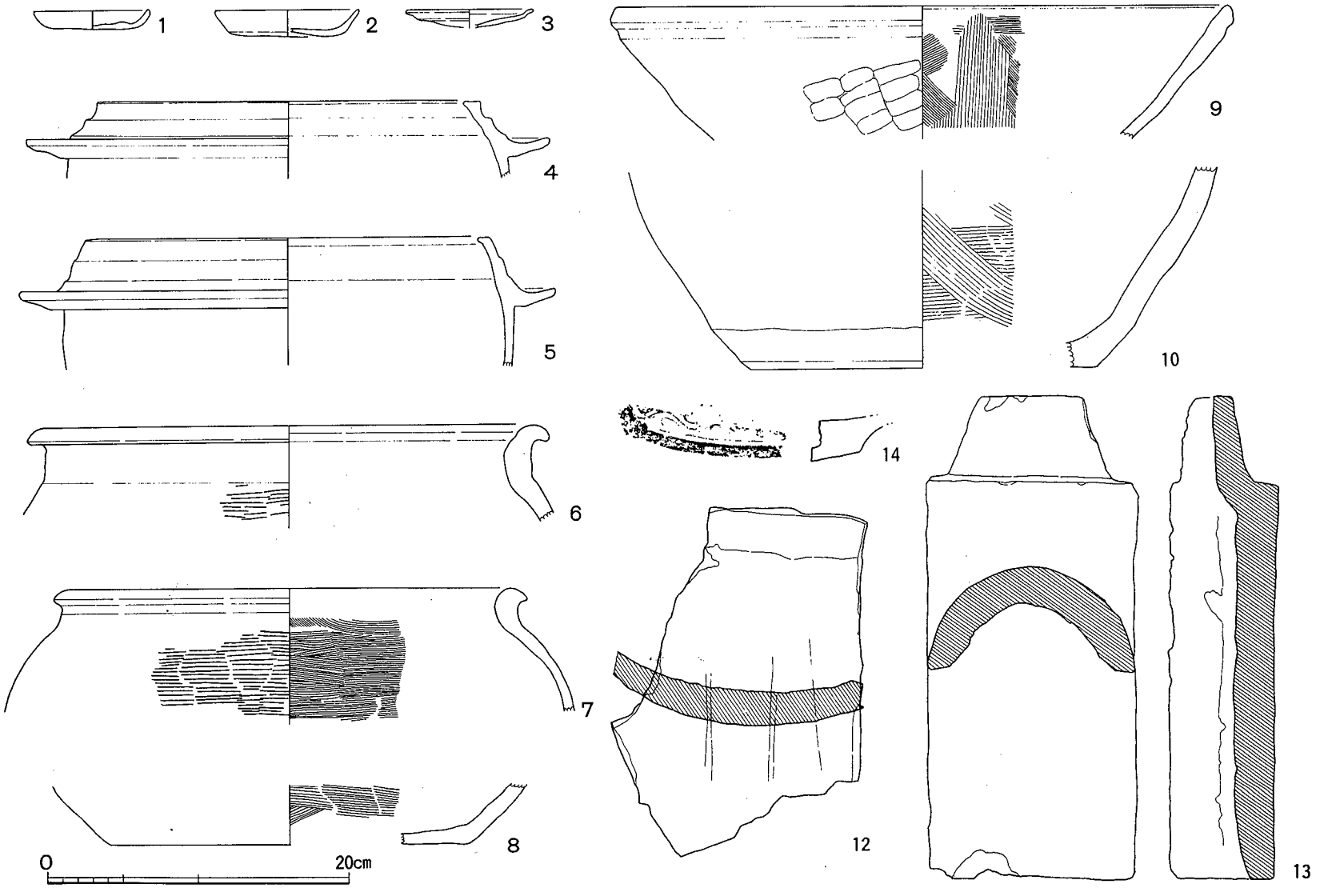
図版第十　　加治・神前・畠中遺跡遺構実測図

図版第十一　木積観音寺跡遺構実測図



図版第十二　秦廃寺跡遺構実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
20cm



図版第十四　木積観音寺跡遺物実測図

図版第十五　木積の地籍図